

二二〇年、ロンドンの彼方

真つ黒な地平線に薄く光が漏れてきた。やがて一筋の黄金の光が透明な空気の層を切り裂いて一直線に巨石の間の一点を射抜く。

シンと静まりかえった空気に小枝を踏んだ音がひんやり響いたその刹那、あたりは俄かに色づき始め鮮烈な波動となってみるみる男の想念に分け入って行った。

「おお、なんと荘厳な……」

たった独りでその光景を見つめていた男の口から思わず言葉が漏れた。

一年でたった一度の出来事、この日の黎明時の数分間、巨石の群が太陽を受けて見せるミステリアスな造形美に魅せられて、男は、自分だけが知っているこの一瞬を体験するために何度ここを訪れただろう。その度に男は、いつも新鮮な感動で満たされたいことはなかった。

トリリトン（組石）とメンヒル（立石）が配置されたストーンヘンジは、紀元前の古代モニュメントである。いったい誰が、いつ、どのように、何のために構築したのか？ 男は独り、感動の中にいつも問いかけているが、答えはない。

昨夜は雪が舞い散る肌寒い日だったが、今は雲一つない晴天である。空がどんどん青味を増し、太陽が白髪を湛えた彫りの深い初老の男の顔を照らし出した。

二一〇年三月二十日の春分の日、神戸<sup>かんべたくと</sup>拓人はロンドンの自宅から数時間、早朝に車を飛ばしてやって来た。平原を渡る風は冷たい。しかし、六十五歳になった拓人の気持ちには、ストーンヘンジを造った古代人の想いが蝟<sup>ろうそく</sup>燭の炎のように灯っている。そしてこの日はいつもにはない、特別な感慨が伴っていた。

#### 世界変革の扉「三・一一」から百年

日本政府から、正式な招待状が届いたのは、三月十一日のことである。三月十一と言えば、日本にとって忘れることができない特異日である。

東日本大震災、それは二〇一一年三月十一日に三陸沖を震源とした、日本観測史上最大規模の巨大地震であった。震源域は、宮城、岩手、福島を中心とする東北地方の太平洋沖。幅二〇〇キロ、長さ五〇〇キロに及ぶ岩盤が東方に数メートルもずれたことで、陸地の形が変形したほどである。地盤の揺れは、首都東京までも巻き込み、高層ビルの高層階では、建物が一〜二メートルも揺れてしなり、街中では電信柱もぐにゃぐにゃと鉛のように曲がり、人々をパニックに陥れた。

震源から遠く離れた東京の惨状以上に、この巨大地震は未曾<sup>みそ</sup>有の大津波を誘発し、青森県から岩手県、宮城県、福島県、茨城県にまで至る太平洋沿岸で二万三千人を超す行方不明者をだし、沿岸の町を村を根絶やしにする大惨事を招いた。が、被害はそれだけに止まらず、津波は福島の原子力発電所を崩壊させ、地域周辺はもとより世界全体に放射能漏れの脅威を与え、長期にわた

る対策を余儀なくされた。

この大震災は、日本の防災対策の未熟さとともに、原子力行政の問題を露呈し、また対応に追われた日本政府の脆弱な無能さを長期にわたって晒す結果となった。後に日本が大統領制を導入する引き金になったのが、この震災に端を発していると言っても過言ではない。

この大震災の影響は、日本だけに止まらなかった。中でもエネルギー問題は、原子力を推進しようとしていた世界的趨勢に急ブレーキをかけ、代替エネルギーを模索しながらも、太陽エネルギーを中心にした自然エネルギーの開発に大きく傾いていった。化石燃料の次代を原子力に見出すようにしていた勢力の目論見は、これを期にぼろぼろと崩れ去り、事態は新しいエネルギーを獲得する技術と方法が実用化するまで混乱した。が、世界の世論は、東日本大震災の影響を見て学び、安易な原子力ではなく、自然の代替エネルギーを混乱の中に見出す方向を選択したことになる。それが地球にとっても人類にとっても賢い選択だったと言えるのは、あの震災からほぼ百年後の今になってからのことである。

だからこそ「三・一一」と呼ばれるようになった東日本大震災は、世界のあり方を根底から変革させるエポックメイキングな出来事として、世界の歴史に記録されたのである。

#### 神戸拓人への招待状

日本政府から神戸拓人に届いた招待状は、大震災から百年後の復興記念祭典への招待であった。

それは一年後の、二二一年三月十一日、震災から百年目に当たるその日に、日本の宮城県仙台市で開催が予定されていた。

が、この招待状は、祭典への出席とともに、祭典のセレモニーとして行われる演奏会の指揮をしてほしいという打診も添えられていた。

じつは、神戸拓人の本職は、「タクト」という名がそうさせたのかどうか、ヨーロッパで頭角を著し名を馳せた、クラシック界で有名な指揮者なのである。六十六歳になった今、巨匠の赴きすらある拓人がロンドンに自宅を構えているのは、ストーンヘンジに魅せられたただけではなく、ロンドン交響楽団の音楽総監督のポストを長らく努めているからでもあった。

東日本大震災復興百年の祭典では、災害で尊い命を失くされた方々への鎮魂のセレモニーと、瑞々しく蘇った東日本復興を祝う記念行事として、仙台フィルのメンバーとともに世界有数のオーケストラから有志が集い、世界の転換の引き金となったことへの想いをこめて、ベートーベンの第九交響曲が演奏される。その指揮棒を拓人に振ってもらいたいという願ってもないものもあった。

この招待状には、もう一つ条件が伏されていた。こんな一行が追伸されている。

「ご来日にはチケットをご準備させていただきますので、ぜひ、ロンドン発東京行きのGPWシベリア路線経由で、ご家族でお越しくださいませ」

どうしてこんなことが招待条件になっているのかというと、それにも特別な理由があった。

#### GPWを構想した「神戸明日人」という存在

GPW（グローバル・ピース・ウェイ）は、約五十年前の二〇六〇年に、SAL（スーパー・アクア・ライン）日韓中海底トンネル路線の開通に伴い開業した、リニアモーター方式超高速鉄道網である。世界の国家間で資源やエネルギー、食料を分かち合うというポリシーに基づき、世界共通のプラットフォームで規格が統一され、たちまち世界全体に施設計画が広まったものである。

GPW構想は、じつは拓人の祖父、日本国初代大統領として活躍した神戸明日人によるものであった。ボーダレスを絶対条件とする超高速鉄道網は、国家間の恒久的融和がないと実現しない。拓人の祖父は、日本人として、日本国の初代大統領を努めている期間に、日本国の代表として世界に起こっている様々な対立の解消に尽力した世界平和の先駆けであった。彼の、世界を融和させようとする努力なくしては、GPW構想の元となったSAL日韓超高速鉄道路線は実現しなかった。

案の定、SALが開通すると、国際間の交流はスムーズになった。物資が大量に必要な時に必要だけ低運賃で届くようになった。しかも、国家間で関税をかけるなど、複雑な交渉をするのがいかに無駄なことがだれにでもよく理解できるようになった。その効果を世界が認めると、GPW構想は瞬く間に実現に向けて動き出した。アジア諸国は中国を基点に進み、ヨーロッパはパリとベルリンを中心に拡張し、その路線はアフリカ大陸を縦断するまでになった。こうして、

アフリカ各地で起こっていた食料難や争いは急激に解消に向かい、人々の間に分かち合いの現象が浸透していった。アメリカでの動きも早かった。南北アメリカを縦断するG P W路線が徐々に伸びて、物資と食料が十分に行き渡るようになり、貧富の格差は徐々に解消されていった。

かつて化石燃料の争奪を巡り、世界各国がエネルギーや食料の利権で繰り返してきた戦争や軋轢の痕跡はない。またかつて、ごく一部の富裕層だけがたらふく食べ、文明の辺境な地域では飢えに苦しむ人が空間を隔てて共存するという構図も、遠い過去のものとなった。

それはエネルギー問題が化石燃料から宇宙ステーションの太陽熱発電に切り替わり、それを世界中で公平に分配する仕組みが国際協力体制でできあがったことが大きな要因の一つでもある。だから、百年以上前にあった、一部の国家がエネルギーの利権をもって世界を牛耳るといような蛮行はない。そして有史以来絶えることがなかった戦争の火が消えた。

それを実現したのが、地球人類社会の動脈といふべきG P Wだったと行うことができるだろう。世界同一規格のG P W超高速鉄道網が世界中に隈なく設置されることで、食料や物資が世界中に均等に分配される方法が実現する。このシステムが稼働を始めると、貨幣経済も次第に少しずつ平準化し、世界中の人々の生活レベルも、地域の特性をそのままに、格差の少ないものになって行く。食料を、家を、教育をだれもが安定して享受できるようになると、戦争は必要がなくなる。実に単純な解決方法なのだが、これまで人間社会は、ついぞ分かち合いによって、国家間や地域

間、民族間にある格差を解消する方法を行わなかった。

その具体的な方法を提示して実現して見せたのが、日本国初代大統領、神戸明日人が構想したS A L・G P Wであることを、今はだれもが知っている。地球人類社会は、G P Wのお蔭で確実な進化を遂げようとしている。

このG P Wを提唱し推進した神戸明日人は、神戸拓人の祖父である。

G P Wは、世界各地でその路線を拡張していた。すでに十年前、ロンドンからはアラブ諸国・インド・アジア諸国経由で北京・東京を往来する路線はできていた。スピードも技術革新の成果で最高時速一〇〇〇キロを達成し、騒音や振動対策もいちじるしく進んでいる。がとうとう、二二一年には、北京―モスクワ―ベルリン―パリ―ロンドン路線が開通する運びとなっていた。その記念すべきロンドン発、モスクワ経由東京行きの最初のG P W超高速リニア新幹線への搭乗に、拓人家族が招待されたのである。

#### 孫の継承―明日人と拓人と飛鳥

二二一年二月十一日、ロンドン発モスクワ経由北京・東京行きのG P W超高速リニア新幹線“H A Y A B U S A”の一番列車には、神戸拓人と奥さんのクララとともに、七歳の孫、飛鳥の姿があった。飛鳥は目を輝かせて、弾丸のように丸い特殊合金で輝く“H A Y A B U S A”の車体を

隈なく見入っていた。

「おじいちゃん、車体の先端についている丸い出っ張った棒は何」

「これはプラズマ発生装置なんだよ」

「プラズマ？」

「そう、何て言えばいいのか？ 物質を一瞬にして消してしまう魔法のマシン」

「あ、魔法使いの棒だね」

「そうだ、そのとおりだ。『HAYABUSA』はね、車体の先頭の魔法使いの棒で目の前の空気を消しながら走るのさ」

「どうして空気を消さなきゃならないの？」

「それはね、列車や車が高速で通ると風が巻き起こるだろう？ 『HAYABUSA』はマッハに近いスピードで飛行機より早く走るので、風がジャマになるからだよ」

「マッハ？ それ、音速だね」

「そうだ、よく勉強してるね。だから、空気が重たい壁みたいに車体に絡んで摩擦が起こる。そうなる騒音が大きくなつてスピードが出せなくなる。だからそうならないように、通過する前の空気をどんどん消していくんだよ、プラズマ放射装置、魔法の杖だね」

飛鳥は、満足げに車内に乗り込み、世界中に拡張しているGPWの話題で、祖父拓人を質問責めにしていた。そんな質問から、GPWはだれが作ったのかという話題になった。

「それはおじいちゃんのおじいちゃん……」

「だあれ、その人？」

「だから前から何度か話したことがあっただろ？ おじいちゃんのおじいちゃん……」

「『あ・す・と』とかいかう人のこと？ 大統領？」

「そうだよ、おじいちゃんは指揮者、おじいちゃんのおじいちゃんは大統領」

「それ、偉い人のことなんだね」

飛鳥は、まだ子供だが、拓人の祖父、神戸明日人のことにとりわけ興味を持って聞きたがる。

飛鳥（アスカ）と名付けられたのは、生まれた月日が、神戸明日人と同じだったからだ。拓人は、初孫の姿を初めて見たときに、妻のクララにふとこんなことを洩らしたことを思い出した。

「明日人じいちゃんの生まれ変わりみたいな気がする……」

「あらあら、生まれた月日がいっしょなだけでしょ」

「いや、飛鳥が生まれる日の前に、明日人おじいちゃんの夢を見たんだ。おじいちゃんがこんなこと言ったんだ、『また、お前に会えてうれしいよ』ってね」

クララは目を丸くして驚いていたが、「でも、私の初孫だから……」と笑ってかわした。

GPW超高速リニア新幹線『HAYABUSA』は、モスクワを超えるとシベリアの凍土を音速に迫る超高速で切り裂き、瞬く間に北京に着いた。ここから列車は、SAL（海底トンネル路線）

に乗り入れて、いよいよ日本の土を踏む。

SAL完成を目前にして、構想者の神戸明日人はこの世を去ったが、それから数十年、明日人のDNAを受け継いだ孫と玄孫がSALを渡る。

神戸明日人が日本初大統領として築き上げ、世界の国づくりの模範とまでなった盟主日本への入口に迫ると、“HAYABUSA”でうたた寝をしていた飛鳥が突然飛び起きて、不思議な言葉を大人びた口調で独り言ちた。

「ああ、やっと念願のSALを渡ることができる……」

## 第一章 青い熱意と赤い挫折

